

紫香楽・野焼きでいえをつくろう

「紫香楽・野焼きでいえをつくろう」の会
(滋賀県信楽町)

I. 活動の背景と目的

1-1. 背景

信楽は天平時代、聖武天皇が「紫香楽宮（しがらきのみや）」を造営された地であり、最近の発掘調査によるとそれまでの予想に反してかなり大規模な、平城宮に近い本格的な都だったことが明らかになってきています。一方陶器の産地としても日本六古窯の一つであり、信楽周辺から採掘される優れた粘土を使い大物（おおもの：茶壺、水瓶、火鉢等の比較的大きな陶製品）作りを得意として栄えてきました。そして殆どの地場産業が辿っているように「近代化」という美名の元に、工業化、機械化をすすめ、「手」から遠ざかり、このところの「グローバル化」の波により私達の生活からも遠ざかりつつあります。

おりしも滋賀県が行う県民活動支援の補助事業「夢～舞めんと（むーぶめんと）滋賀 湖国21世紀記念事業」があり、これを機会に「やきものの原点とも言うべき野焼きでいえをつくろう」と有志が集まり2001年5月「紫香楽・野焼きでいえをつくろうの会」が発足しました。

1-2. 目的

“太古の人々がやきものを焼いた最初の喜びを「野焼きでいえをつくってみる」ことによって、もう一度思い出し、それをやきもののふるさと信楽の風景に組み込むことで、ここで生まれ、育つ子供たちが、どこに飛び立っても帰れるふるさとの原風景をみんなでつくる。そしてこのプロジェクトを通して、様々な立場の人々と交流しながら、自然とともに生きる21世紀のライフスタイルのあり方を発見し、これから信楽焼を展望していくたい。”と当初の目的を定めました。

そして最終目的として「野焼き」によって、やきものとは何か、信楽焼とは何であるべきかと、信楽焼本来の持つ力をもう一度見つめ直し、世の中の価値観が効率重視から大きく変革する今、まちぐるみで「これが信楽である」といったブランドイメージを戦略的にかたちづくり“新しい信楽＝紫香楽”的イメージを、「SHIGARAKI-ART＝紫香楽アート」として全国、さらに世界に発信し、紫香楽ファンネットワークの構築をも行おうというものです。



家の枠組み作りと煉瓦割り、
粘土の打ち付け等を体験する
ワークショップ



砲弾型の粘土の家の外形が
整ってきた



火入れ式の後、粘土の家の内側
焼成を行った

II. 活動の内容

2-1. 野焼きのいえづくり

「野焼きのいえ」は遊休地や遊休農地を利用していつも作ろうというものです。とはいっても、種々の条件を考慮すると、年にひとつまたは2年にひとつ完成すればよいということで活動を開始しました。私達メンバーはこうした家が少しづつ増えて、村の新しい風景をかたち創ることに想いを馳せながら。



この粘土の家の焼成のために設計し、現地で作りあげたトタン窯を組み立てる

最初の家は2001年7月から、住民と地元陶芸家とデザイナーの共同制作で作り始め、呼びかけにより全国各地からワークショップに参加された皆さんにも作業をしていただき造り上げられました。そしてこの高さ4m50cmの粘土の家全体を6m30cmの軽量C鋼とトタン板で十角錐台形の窯を作り、家一つを丸ごと焼いたのです。このサイズを一度に焼上げるという例は世界でも極めて少なく、全く未経験の作業を都合四回、その最終焼上げは2002年5月（発足1年後）になりました。

これらの作業にはどれも専門的知識と技術が要求されるものであります、手作業にこだわって行ったために、精神的にも肉体的にもかなりハードな作業となりました。特に焼成作業は厳しく、経費節約のためのトタン窯は表面温度が350°C～500°Cにもなり、その状況下での薪をくべる作業は私達が耐えることのできる限界を超えて脱水症状を起こしそうな作業となりました。



大焚き
数日前からあぶり焚きをはじめ、大量に運び込まれたこわ板を割る作業が連日続いた

このように献身的に作業をしていただいた皆さんの努力で当初の計画以上の大きな「野焼きのいえ」が完成しました。私達にとって、完成させたという自信は勿論のこと、作業中の試行錯誤や協議を通じて得た様々な経験とデータは、私達にとっても、このプロジェクトにとっても大きな資産になるに違いありません。

2-2. 第2号棟建設への取り組み

1号棟が間もなく完成という頃、作業をしながら、私達メンバーの中から「この場所にこれ一つではさみしい、この同じ敷地内にもう1棟つくろうではないか」と言う意見が出ました。各自いろいろ意見を述べあいましたが、最後にはその場にいたメンバーはその意見に同意しました。

1号棟完成後、その周辺整備の計画案とそれに大きくかかわる2号棟の建設について企画委員会を開きました。その結果、当初の「信楽町内数箇所へ1棟ずつ設置して、それらをイベント等でネットワーク的に利用する」という計画を見直し、「設置する敷地の風景や条件に合わせて野焼きのいえを何棟か創り、それらをイベント等で単独、もしくはネットワーク的にも利用する」ということに改めました。また、1号棟の周辺整備については「家の周りに木粒を土留に使用した排水溝を掘り、その周りを花畠、薬草畠、歩道をレイアウトする。多目的に利用する

ため資材運搬用の軽トラックの通る道も確保する。」ということ
で意見の一一致を見ました。

第2棟建設については設置場所以外に、どのような規模、形
態そしてどのような制作方法で創るかという課題があります。
しかし、それらも私達の中には1号棟の反省として、もう少し
たくさん的人数が集えるものが欲しいと言う共通の希望ができ
ていますので、仮屋根の設置条件とも相まって、「円筒状、2階
のあるいえ」に決まりました。制作方法は強度や安全性はもちろん
経費や人手間にも大きく係わることであり、1号棟の経験
をふまえて(1号棟では経費が520万円と人手間600人以上かかり
ました。なお間接経費および人件費は含まれていません)、そ
れらの条件を満たすために更なる検討が必要であると課題は残
りましたが、制作準備を進めるために仮屋根の設置を決定しま
した。

2-3. 土鍋づくりセミナー

かねてより検討していました「土鍋づくりセミナー」を2002
年11月17日(日)に「野焼きのいえ」の建つ敷地内でNPO
法人信楽陶器研究会の協力のもと開催しました。多くの人の参
加を図る為に、次のような呼びかけ文をつくりました。「私達の
生活の中で『鍋・釜』と言えばその文字が示すように「鉄」「アルミ」
そして「ステンレス」になり、今や「電器」となっています。そうした中でも寒い季節には『土鍋』が根強い人気を得
ています。振り返ってみると、つい50年前には私達のまわり
に土物は沢山ありました。そして世界には今でも『土鍋・土釜』
で生活している人々もいます。土鍋の形と造り方を検証しながら
[誰にでもできる楽しい土鍋づくり] セミナー第1回を行
います。多数御参加下さい。」

この呼びかけに、当日は天候に恵まれたこともあり、滋賀県
内は言うに及ばず、大阪や神戸から、年齢も10歳から60歳代
まで30名を越える人が参加して下さいました。

最初に滋賀県工業技術総合センター信楽窯業技術試験場の伊
藤主任主査のビデオレクチャー「パパアニューギニア、ペルー、
インドの土器づくり」があり、野焼きによる土鍋づくりの要領
と注意点が説明されました。参加者はレクチャーの後、野焼き
用粘土で各人各様の思いを込めて作り始めました。初心者や大
きな鍋を作りたい人は成形が難しいため、主催者が用意した台
所用のざるなどを補助型にして作ります。また、ざるを使わな
いで地面を鍋状に掘りそれを補助型にして作る人もいました。

今回のセミナーは何処でも、誰でもできる方法ということで
特別な道具類は使わず、手と簡単なヘラだけで制作しました。
参加者の皆さんには昼食を取る時間も惜しむほど熱心に取り組ま
れ、終了時には全員土鍋を作り上げることができました。出来
上がった土鍋は乾燥後、野焼きの家で焼かれ、完成した暁には

陶器の家を焼き上げる
—続き



トタン窯の表面温度は500度に達
していた



ネジをはずしながら1枚ずつトタ
ン窯は解体されていく焼き上がっ
た家の上は人が乗っても大丈夫



メンバーが予想していた以上に陶
器の家は赤く焼き締まっている

その鍋で「ご飯を炊いて皆さん一緒に食べましょう」という提案でセミナーは終わりました。その日は本当にお天気も良く終始、笑い声の絶えない一日でした。技術指導には信楽陶器研究会の皆さんのお力をお借りして楽しい交流会さながらのセミナーを開催することができました。

当日個人的に参加されました毎日新聞社大津支局の奥山記者は土鍋づくりだけでなく、その合間を縫ってしっかり取材もされたらしく、後日新聞に体験記を掲載されました。

III. 活動の効果

この野焼きプロジェクトはまだ始まったばかりです。2001年度は滋賀県の「夢～舞めんと滋賀 湖国21世紀記念事業」の認定を受けた事業ということもあり、また過去に誰も造ったことが無いということも手伝い、このプロジェクトの意図や目的を明確に掲げ「野焼きのいえを造ることが目的ではない」と明言しているにもかかわらず、殆どの人は興味津々の眼で見つめ、陶器に携わっている人は疑いの眼ができるかどうか眺めていました。私達にとっても高邁な理想や夢より、先ず何が何でも完成させなければならないという気持ちで、多分にイベント性を強く感じるものであったことは間違ひありません。

それに比べて、2002年度は1号棟の実績と皆さんの好意に支えられ、落ち着いて取り組むことができました。「野焼きのいえ」が新聞やテレビ、ラジオ放送に多数取り上げられたこともあり、公共団体や建築家さんの問い合わせ、見学等もありました。また、信楽町民の中から「ここに設置してはどうか」という意見や提案も少数ながら出るようになってきたことは私達にとって嬉しいかぎりです。

ところが、今年度は滋賀県に補助する体制がとれておらずまた地元信楽町は社会情勢の悪化も手伝って補助金は出せないとのことでした。そうなるとハウジングアンドコミュニティ財団の「第10回住まいとコミュニティづくり活動助成」と自力で活動するという経済的にはかなり厳しい状態でした。

このような状況の中で開きました「野焼きのいえの土鍋づくりセミナー」は本当に好評で、参加した皆さんに楽しい体験をしていただくことができました。一方、私達にとっては「野焼きのいえ」の目的やコンセプトを皆さんに広く伝えることができる機会でもあります。この土鍋づくりセミナーは私達にとっても参加した皆さんにとっても双方負担が軽く、今後は毎年2回程度のペースで開催したいと思っています。

IV. 今後の課題

野焼きプロジェクトを進めるにあたり、資金と人手が必要なことは言うまでもありませんが、その目的とする「新しい価値観を創造すること。紫香楽ファンネットワークを構築すること



世界各国の土器作りを紹介したビデオ鑑賞及び土鍋作りのレクチャー



野焼き用粘土で形作った作品を野焼きの家を利用して仕上げていく



出来上がった作品は野焼きの家の内で乾燥させる

と。」は一朝一夕にできるような生易しいことではありません。また、急げばできることでもありません。私達は急がずたゆまざ時間の許す限り長く続け、地元はもとより広く日本および世界の方々に一人でも多く参加していただき、一緒に作り上げていきたいと思っています。

ところで、私達の「焼き物のいえ」「粘土のいえ」は話題になりましたが、確かに日本の自然環境下ではなじみも少なく、今まで殆ど見たことがありません。しかし、考えてみると伝統的な日本家屋には土壁が使われており、土蔵は土で塗り固められて、多湿な自然環境のなかで大きな役割を果たしています。他方世界に目を向けてみると、インド、スリランカ、中近東、アフリカと沢山の人々が粘土のいえ、焼き物のいえで生活をしています。多分その地域はそのいえが非常に快適なものなのでしょう。私はインドとスリランカの経験しかありませんが、やはり、あの太陽が照りつける40度以上の高温の中、厚壁で窓の小さな粘土のいえは大変過ごしやすいと感じました。

小松義夫氏の写真集「地球生活記—世界ぐるりと家めぐりー」を見ていますとアフリカ等の「粘土のいえ」は大変造形的であり、機能的でもあります。例えばブルキナファソのカッセーナ族の家や西アフリカのトーゴのタンベルマ族の家など興味をそそられる家が沢山あります。そして、何と良く工夫されていることでしょうか、私達が悩んでいたことも彼等の知恵を学べば簡単に解決してしまいました。できれば「紫香楽・野焼きでいえをつくろう」の会のメンバーが現地へ出向き、実際にそれらの家を見せていただき、作り方などを学んできたいものです。

また、一方でスリランカやインドの粘土の家がサイクロンにより壁が溶けるのを防ぐため、簡単に表面をコーティングする方法はないものだろうか、研究してみようと言員で話し合っています。

今後、やらなければならぬこと、やりたいことは山積みですが、きっと私達は世界中の多くの人の知恵をお借りしながら、必ず達成できる日を信じて息の長い活動を続けていきます。

<団体活動データ>

■「紫香楽・野焼きのいえをつくろう」の会

活動テーマ	紫香楽・野焼きでいえをつくろう
活動目的	<p>以下の活動を目的とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 歴史あるやきものの里である「紫香楽」と「紫香楽アート」を県内・外、海外に向けて発信すること やきものの生まれる瞬間の感動を多くの人々と共有すること 子どもたちが誇りをもって思い出せる紫香楽らしい原風景をつくること 県内外の人々を巻き込んだ「紫香楽」ファンネットワークをつくること
設立年月	2001年1月
代表者名	西尾矩昌
活動地域	滋賀県信楽町
メンバー	70名 彫刻家、陶芸家、公務員、会社員、主婦等

●団体設立の経緯

特定非営利活動法人信楽陶器研究会の理事長で、彫刻家の西尾氏が中心となって、焼き物の原点である野焼きの家を建て、その技術を活かした新たな住空間を提案し、信楽を核とする地域住民と全国からの参加者が交流する新しいコミュニティの実現をはかると、地元の行政、窯業関係者、デザイナーに呼びかけ、会を結成した。

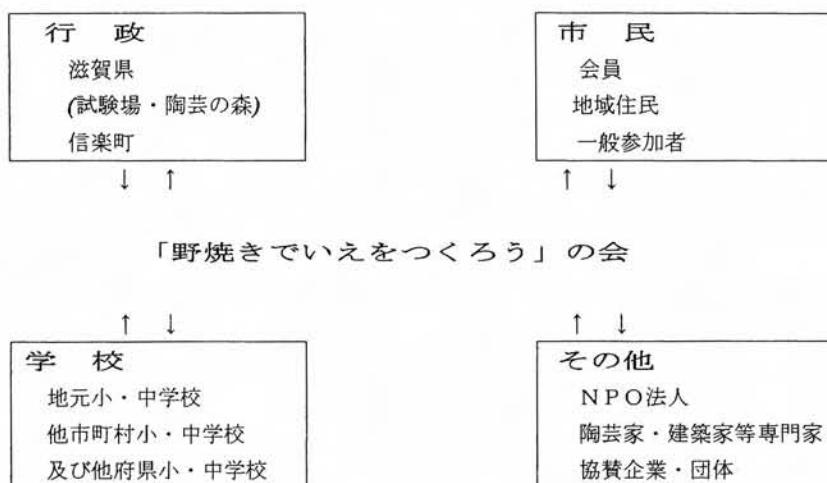
●活動地域図（活動位置図）



●これまでの活動

信楽町多羅尾の六呂川沿いの土地所有者の協力を得て、そこに1棟、野焼きで家をつくった。全国から賛同者を集めて、信楽陶器研究会が協力しながら造りあげた。滋賀県の湖国21世紀記念事業から200万円、町から100万円の補助金を得ている。

(活動の全体像)



2001年5月 発起人会議 家づくりのスタート

6月下旬 現場の草刈り

8月 ワークショップの開催 枠組みづくり、粘土の打ち付けなどを行う。

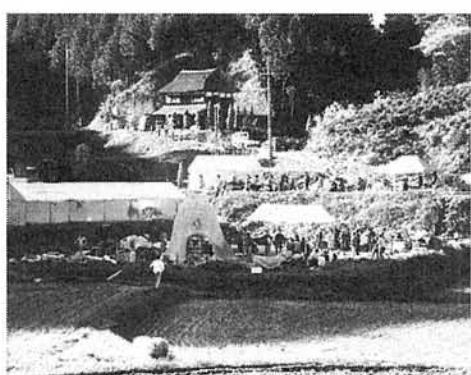
以後11月の火入れまで、粘土で家を形づくる作業を続ける。

11月 火入れ (家の内側の焼成)

12月 大焚き (家全体の焼成) 家のまわりに窯を組み立て薪をくべて行う。

2002年5月 2度目の大焚き

6月 窯出し (野焼きの家の完成)



現場風景



野焼きのいえ

●助成対象活動

2つ目の野焼きの家を同じ敷地内につくる準備(借屋根設置、資材搬入)を行った。その一方で、完成した野焼きの家とその目的を広く知ってもらうために、土の焼き物に親しんでもらうことができる土鍋づくりセミナーを開催した。



土鍋づくり



つくった土鍋

●これからの予定

敷地内に2つ目の野焼き家をつくる予定。今後も、予算、時期等を見ながら建設してゆく。